

学業成績不振と非行との関連

——社会的絆理論の観点から——

赤 松 茉莉花

1. 本研究の目的と仮定

本研究は、大学生を対象とし、学業成績、親子関係、他者評価、否定的自己、学校的価値の内在化の5つの要因に着目し、これらがどのように影響しあい、非行化傾向を生じさせるに至るのかについて、Hirschi (1969) の社会的絆理論 (social bond theory) を参考にして、明らかにすることを目的とした。仮説モデルとして、学業成績不振から介在変数を経て非行が発生するプロセスを「学業成績不振から親子不和、否定的自己、低他者評価を生じ、その結果学校的価値の内在化が阻害され、非行化傾向が高まる」ものであると推測した。

2. 方法と結果

参加者は男性 114 名、女性 190 名の計 304 名 (平均年齢は 18.3 歳、標準偏差 0.65) だった。調査は 6 つの尺度 (計 66 項目) で構成される質問紙を作成し、質問紙回答による調査を行った。分析は構造方程式モデリングで仮説モデルの検討を行った。その結果、仮説モデルを支持する結果が得られた。

3. 考察

分析結果から、学校的価値の内在化不全には否定的自己が大きく関わっていると推測される。学業成績を重んじる学校では学業成績不振が否定的自己を増大させ、学校的価値の内在化不全を起し非行傾向が高まるというプロセスが推測できる。

今後の研究課題としては、幅広い母集団を集め、一般青少年を対象とした非行の発生プロセスに関する研究を行い、それをもとに日本における一般青少年と非行との関連を十分に理解することが必要である。従来の非行進度の高い少年を対象とした研究報告と比較し、一般青少年と非行少年とは何が違うのかを検討するというアプローチを用いることがますます重要となってくるであろう。

〈参考文献〉

Hirschi, T., (1969). *Cause of Delinquency*. University of California Press. (ハーシ、T. 森田洋司・清水新二 (監訳) (1995). 非行の原因－家庭・学校・社会のつながりを求めて－文化書房博文社)